

三方よし

自分だけいい

自分と相手もいい Win Win の関係

自分も相手もさらに第三者もいい

近江商人 滋賀県 伊藤忠、丸紅、高島屋、日清紡、日本生命

他国行商”が基本のスタイル 諸国産物廻し 京で古着 会津で売って大儲け

他国行商の場合、行商を行う土地の人たちからの信用を得なければ、商売が成り立ちません。

信用を築くための智恵として代々教え継がれてきたのが有名な「三方よし」の精神です。

「売り手よし、買い手よし、世間よし」という三方よしの精神

近江商人の社会的な貢献活動は、治山治水、道路改修、貧民救済、寺社や学校教育への寄付など

具体的な三方よしの事例

タクシー代 1500 円 乗合 750 円づつ さらに運転手もいい 2000 円 1000 円づつ負担

近江商人がめざしていた本来の社会的貢献ではなかった

人に知られないように密かに善行を施す「陰徳善事」が本当の教え

人に見えるところで行われる行為で「陽徳」

人に知られないように、人のためになる行為をすることが「陰徳」

さてどのようなものがあるか考えてみましょう

見返りを一切断ち切ることで、本当の信用が生まれる

出光石油の創業者、出光佐三（いでみつ さぞう）の話

出光石油の創業者、出光佐三が26歳の時の話です。

独立して事業を起こすことを考えていましたが、家が破産して資金がない。そんな時、学生時代に息子さんの家庭教師をしたことのある淡路の資産家で日田重太郎という人が、別荘を売って当時で六千円、現在価値では約五千万円もの大金を独立資金としてポンと出してくれたのです。

「これはお前にやるんだ。おれは事業なんかに興味はないから返す必要はない。ただ独立自営というその主義を徹底してやり抜け。そして親に孝行して、兄弟仲良くせよ。それだけがおれの希望だ。」そして、若い佐三に対して、「このことは、他人に言っちゃいけないよ」と、念を入れたといいます。

「これが、日本人の陰徳のあり方です。”自分はただ出光を助けるだけでいい”という陰徳のあり方を、私は日田さんから教えられたのです」佐三は晩年にこのように述懐しています。人間は自分の存在や、自分が行った行為を周りの人に認めて欲しいと思うものです。

これは、人間が一人では生きることができないので、周囲との関係性を保ちたいという依存心からくるのでしょう。

相手のための行為でも、何らかの見返りを期待すると、最終的には自分の欲求を満たすための行為であったこととなります。

ところが自分のとった行為が他人に認められなくてもよい、という心境になるとこれは違ってきます。

それは自分への見返りを一切断ち切っているのです。

「返さなくてもいい」と言われた時、佐三はまだ半信半疑だったのではないのでしょうか。半分しか信じていなかった人から、「他人に言っちゃいけないよ」と念を入れられたことで、初めて全幅の信頼を寄せたものと思われま。

日田重太郎氏の”与えて報いを求めない”という行為は、”自分はただ出光を助けるだけでいい”という信念を、若き佐三の心に植えつけたのでした。